

一心寺かわら版

第二号 平成十六年九月発行

「愛と慈悲」

ここ最近「愛」ということについて考えさせられることが三つありました。

先日あるテレビ番組のアンケートで、結婚暦のある七〇歳以上のご婦人に、「結婚に大切なのはお金か愛か」ということを質問していました。みなさんならどう答えますか？その答えは約一〇〇対九〇〇で愛が大切ということでした。少しほっとすると同時に、もつと若い人に聞いたらどうなるのかなとも思いましたが、「愛」の大切さを否定する人はいないでしょう。

また、あるドキュメント番組ではネパールの十一歳の奴隷少女を取材していました。彼女は先祖代々背負った借金のために、生まれながらに奴隷として働くことを余儀なくされていました。お茶の栽培農園で働き自由な時間もなく、学校にも行けず、雨露をしのげるだけの家で暮らしています。ある日、農園主人の長男家族の世話をするために町へ行きます。今晚は綺麗なアパートで眠ることができるわけですが、早く家に帰りたいというのです。いくら苦しい生活であっても、彼女にとっては家族と一緒にいることが安らぎなのです。綺麗な家で過ごすより、私のことを思ってくれる人と共に過ごす方がいい、そこには「愛」があるからなのだと感じました。

先日の新聞に、小学校高学年の子供たちに「自分のことを好きか」という質問をしたアンケートが載っていました。それによると男の子は三五%、女の子は二八%です。これは高いでしょうか、低いでしょうか？私は低いと感じました。自分には悪いところがあると思つて「好きではない」と言っているのならばいいのですが、根本的に自分を受け入れていないということならば大変ですね。

私も子供の頃、嫌いなどころがありました。まず足が遅いこと、小学校の頃は足が速いと運動会のヒーローですが遅いと格好悪いことこの上ない。他にも逆上がりができないことや、給食が全部食べられないなどたくさんありました。しかし自分のことを「好き？」と問われたらどう答えていたでしょうか。

心理カウンセラーの眞田忠美さんは「心の中に何か足りない感じがあるとき、その足りないものは必ず「愛」である」とおっしゃいます。アンケートに答えた子供たちには「愛」が届いているでしょうか。嫌いなところもあるけど、その私を愛してくれる親がいる、好きで仲良くしてくれる友達がいる、そういう存在があることで、「うれしいな、自分自身を好きになつて大切にしよう」という心が生まれるのではないのでしょうか。今の子供たちにそういう存在があるのかを問われている気がします。

ではこの「愛」とはどのようなものでしょうか。夫婦愛、家族愛、友人愛などいろいろな関係の中にあるでしょうか、仏教では

「愛」というものを否定的に捉えます。それはなぜかというところ、愛着という言葉があるように、「愛」には必ずといっていいほど執着が付いてまわるからです。

自分の求めるものに愛されたい、愛するものを自分のものにしたというように愛が欲になってしまふのです。しかし、仏教は「愛」自体を否定するのではなく、真実の「愛」である「慈悲」を説きます。「私」というものが入らない愛です。

阿弥陀仏が私たちを救いたいという願い、それが『無量寿経』の四十八願ですが、そのすべてに「設我得仏（せつがとくぶつ）不取正覚（ふしゅしょうがく）」、「たとえ私が仏になるとしても、みなを救うことができないならば仏とはならない」とおっしゃいます。言い換えれば「あなたが喜ばなかったら私も喜ばない」ということであり、「いのちのあり方に正しく目覚めたものは、必ず他のいのちに寄り添い、共に育んでいくはたらきとなる」ということをあらわしているのでしょう。これこそ真実の「愛」でしょう。

昔から「二人寄れば楽しきは倍、悲しきは半分になる」といいますが、親鸞聖人は

「一人居てよろこびなば二人と思ふべし。二人居てよろこびなば三人と思ふべし。その一人は親鸞なり。」

とおっしゃったといえます。真実の「愛」とは「同体の大悲」（私とあなたはひとつであって



自らと同じくあなたを慈しむ）です。人と人とのつながりが薄くなってきている現代ですが、私たちは阿弥陀仏から「大悲」をいただいている、その中でみな共に生きているという「同朋精神」に立ち帰っていききたいものです。

真宗仏事について②

① ご本尊

ご本尊・・・阿弥陀如来絵像

もしくは南無阿弥陀仏（六字名号）

脇掛け（向かって右）・・・帰命尽十方無碍光如来（十字名号）

もしくは親鸞聖人絵像

脇掛け（向かって左）・・・南無不可思議光如来（九字名号）

もしくは本寂上人（本山興正寺第二十七世）絵像

阿弥陀仏とは、「アミターユス（無量光）」・「アミターバ（無量寿）」という昔のインドのことは「アミタ」を音写したものです。南無とは同じく「ナモ（帰命）」の音写です。南無阿弥陀仏とは阿弥陀仏の命に帰する、無量の光・寿の仏さまに帰依するという意味になります。

ご本尊は四十八本の光を放っています。これは阿弥陀仏が私たちを救うと誓われている四十八願をあらわしています。また私たちの方へ手のひらを向けられている右手は、真実の世界へ還って来いよという「招喚」（しょうかん）の心、左手はどんなことがあ

つても必ず救い取るといふ「撰取」(せつしゆ)の心が込められています。

九字・十字名号(みようごう)は、阿弥陀仏の別名で、あらゆる世界にけつして妨げられることのない、はかり知ることのできない智慧・慈悲の光が届いていることをあらわしています。「如来」(によらい)とは「如(真実)より来生する」という意味で「仏」ともあらわされます。

ご本尊は私たちの拠りどころですから、ご本山から迎えるようにしましょう。

② お灯明

仏さまに手を合わせる時にはお灯明をあげましょう。その明るく照らすあたたい光は、私たちの心の奥底までも知り尽くし、迷いの闇をくまなく照らして真実に向かわしめる、一切の生きとし生けるものを救い取る智慧・慈悲の光です。その光から、休むことなくはたらきかけて下さっている仏さまのみ心を味わいましょう。



③ お花

お浄土は花に包まれたところと言われます。ですから昔から花によつて仏さまを敬つてきました。みずみずしいお花を供えてお浄土を想い、仏さまのみ徳を讃えましょう。



また小さな華瓶(けびょう)には水を入れ、香木である檜(しきみ)などの青木を挿し(色花は用いない)、清らかな香水として供えます。なお、この他に水や茶を供える必要はありません。

④ お香

阿弥陀仏のお浄土はすばらしい香りで満ちていると言われます。その芳香で心身を落ち着かせて清らかなお浄土を想い、仏さまを敬いましょう。

抹香は金香炉に炭を入れて焚きます。土香炉には線香を用品ますが本数に決まりはなく、立てないで横にします。香炉にマッチの燃えカスを入れるのはやめましょう。



次に焼香の作法ですが、焼香卓の二、三步手前でそのままご本尊に向かつて一礼(合掌せず)し、進んで着座します。右手の親指・人差し指・中指の三指でお香をつまみ、そのまま二回焼香してから、合掌・お念仏・礼拝します。

真宗では、焼香は念を込めるものではなく、その場をお浄土のように清らかにするものですから、お香を額にいただく必要はありません。

線香を長く持たせたい場合は、くの字に何本かをついでおきましょう。